

地理学報告

2016年12月25日 第118号

論説

- 論説アートから考える名古屋・中川運河再生の可能性
 竹中克行・金原彩音 1
- 「四国遍路」の世界遺産登録運動にみる文化景観の意味変容
 新林智典 17

短報

- オランダ国境地域研究ノート
 -越境する人びとと空間動態の変化を視点に-
 伊藤貴啓 31
- 「恋人の聖地プロジェクト」がもたらす観光地への影響
 -福岡県北九州市における恋人の聖地を事例に-
 加藤凌次・田中隆寛・祖父江加菜・中田翔吾 51
- 屋台意識調査からみた福岡市の屋台における現状と課題
 -「福岡市屋台基本条例」施行後に着目して-
 瀬野尾大智・永用拓也・横溝陽美・山田 航・阿部亮吾 59
- 大型商業施設に隣接する中心商店街歩行者の回遊行動
 -福岡市博多区「川端通商店街」を事例に-
 小村香薫・坂真太郎・古田竜太郎・炭本大樹・中西 悠 67
- 福岡市中央区天神地区のオープンカフェ事業にみる成果と課題
 中田翔吾・原井川未樹・加藤大智・金森星哉 75
- 福岡県における「辛子明太子」製造業者のローカルな経営戦略
 -老舗企業「ふくや」を事例に-
 加藤直真・伊藤 愛・木下雄太郎・阿部亮吾 83
- 「環境共生都市」福岡アイランドシティ住民の居住環境評価と自然環境に対する意識
 中西 悠・林 優介・荒川皓平・宇野奈苗・渡辺惣一郎 91

教育活動

- 沖縄県石垣島の資源を活かした地域観光学習の試み
 -小学校4年生を対象にして-
 寺本潔 99
- 高校から大学への地理
 -愛知教育大学での講義担当を踏まえて-
 高橋幸仁 105

学会記事・教室だより

会計報告

編集後記

アートから考える名古屋・中川運河再生の可能性

竹中 克行・金原 彩音

(愛知県立大学)

- | | |
|--------------------|-------------------|
| I はじめに—アートと都市再生 | IV 調査結果の比較分析 |
| II 中川運河におけるアート活動 | V おわりに—アートがいきるために |
| III 活動主体へのインタビュー調査 | |

キーワード：中川運河，アート，都市再生，交流空間

I はじめに—アートと都市再生

アートが都市再生に果たす役割については、さまざまな議論がある。

アートには、日常の出来事や忘却しがちなものに対する人々の見方を変え、人々に価値観の転換を促す力があるとされる。音楽学者の中川真は、「(アートは)見方のある瞬間にガラッと変えたり、フィックスされた精神の中に亀裂を生じさせていく。その逸脱の中に入り込んでくるのは、自分が抱え込んでいた他者性」ではないかと言う(中川+編集部, 2011:34)。これは、たとえば菱びた古民家が集まる界限や錆びついたジャングルジムのある公園といった、生活のなかに姿を現す普通の場所と向き合うわれわれ自身の感覚にも当てはまる。とくに、中川運河のような港湾・産業空間については、景観工学の立場からテクノスケープを分析した岡田昌彰の議論が示唆に富む(岡田, 2003)。岡田は、場所に溶け込まず、多くの人々に違和感を与えている対象物がプラスの価値を付与される過程に注目し、これを「異化」の概念によって分析する。そして、枯山水庭園やランドアートなどの例をあげて、異化を生起せしめる仕掛けの一つとして、アートの役割を強調した。

もちろん、遊休化した産業・港湾施設がアーティストを惹きつける理由の一つには、周辺に迷惑をかけずに活動できるスペースが得られる、といった物理的な便利さがあるだろう。しかし、より本質的なのは、日

常性からのズレを生じたそれらの空間が、しばしば人の感性を刺激し、創造的な活動へ駆り立てるということである。工場や倉庫は、設備の整ったスタジオや製作室とは違った、意外性に満ちた創作空間になりえる。さらに、港湾や都心周辺のインナーエリアなど、注目度が低かった場所で行われるアート活動は、より裾野の広い創造的な活動の舞台を用意することも少なくない。ファッション、雑貨、食などの分野で、小規模であっても創作性を重視する事業主らは、アートの表現に象徴される街の新しい動きに敏感である。経済地理学者の川端基夫は、アートには「場所のチカラ」を高める役割があると言う(川端, 2013)。

他方、価値観の転換とともにもう一つ指摘されてきたのが、人々の出会いを動機づけ、コミュニケーションを生み出すアートの働きである。劇作家の平田オリザは、伝統的な共同体空間に代わる「新しい広場」をつくり出す文化の役割を強調し、コミュニケーションに参加する人々が「文化の自己決定能力」を身につけることで、地域再生の道が開けると主張する。そして、「自分たちの愛するものは何か、自分たちの誇りに思う文化や自然は何か、そして、そこにどんな付加価値をつければ、よそからも人が来てくれるかを自分たちで判断できる能力」こそが文化の自己決定能力だと主張する(平田, 2013:100)。各地で行われている芸術祭の意味を理解するには、短期的な経済効果のみをみるだけでは不十分であり、社会的弱者を含む一般市民を文化の関心共同体とし、社会包摂インクルージョンによる地域再生を実現するという視点が不可欠であろう。

アートによる交流空間の創出は、個々のイベントのデザインを超えた戦略的な可能性をもつだろうか。創造都市論は、創造階級（クリエイティブクラス）が集まる境界の形成から、デザイン、コンピュータのソフトウェア、音楽・映像など、知的財産の開発を特徴とする産業の創出による都市経済構造の刷新を展望する（野田，2014）。日本では、経済産業省がデジタル化された文化商品をターゲットとするコンテンツ産業振興政策を展開している。しかし、新しい産業が胚胎する町をつくるという意味では、デジタル化に馴染まない舞台芸術や工芸などの分野を含めたアートの役割が大きい。

さて、先行研究が提起してきたこれらの議論に一定の妥当性を認めるとしても、実際の都市において、アートから都市再生に至るシナリオが現実味のある都市政策の選択肢になりえるかどうかは、それ自体、慎重な検討を要する問題である。横浜や金沢といった日本における創造都市の先行事例を別とすれば、多くの都市において、市の政策体系へのアートの位置づけはいまだ不確定と思われる。そうした問題状況をふまえて、本稿では、名古屋・中川運河（図1）の再生運動に焦点を当て、アートは都市再生の処方箋たりえるのかという問いについて、アート活動に直接・間接に関わる主体の視点を通して考察する²⁾。分析に必要な基本データは、後述の助成事業「ARToC10」で採択された活動グループへのインタビュー調査から得ることとし、それらグループが実施したアートイベントでの参与観察で得た情報を補完的手段として位置づけた。

以下では、議論の前提条件として、中川運河再生に向けた都市政策のなかで、アートにいかなる役割が期待されてきたのかを整理する（Ⅱ）。そのうえで、アート活動に対する公的支援の目玉とされた「ARToC10」事業に焦点を絞り、助成を受けた4つのグループを中心対象とするインタビュー調査のデータを提示する（Ⅲ）。さらに、調査結果の比較分析を通じて考察を深め（Ⅳ）、アートから運河再生へというシナリオを現実のものとするために、今後いかなる条件整備を進める必要があるかについて、若干の試論を提示したい（Ⅴ）。

Ⅱ 中川運河におけるアート活動

1. 名古屋の港湾空間とアートシーン

名古屋の港湾空間とアートシーンの繋がりは、1990年代以前に遡る（清水，2016）。とくに、1999



図1 中川運河の概況
（資料）竹中（2016：20）の図をもとに作成。

～2003年のアートポート事業では、メディアアートなどの分野で新境地を開こうとする多くの若手アーティストが、ガーデンふ頭東側の空き倉庫を拠点として、制作・発表の両面で多彩な活動を展開した。同事業は、「市民芸術村」構想として名古屋市の計画にも盛り込まれたが、事業継続を望むアーティストの意志に対して、耐震改修に多額の費用を要することなどが壁となった。

地元アーティストの間に喪失感が漂うなかで、新しいアートシーン創出に向けての転機となったのが、2010年の「中川運河チャンネルアート」Project No. Zero 開催であった³⁾。インテリアデザイナーの服部充代氏の呼びかけによって始まったこのアートイベントは、2014年までの5回にわたって、倉庫空間を利用した屋内コンサート・パフォーマンス、倉庫外壁への映像投影、水上インスタレーション・パフォーマンスなど、多彩なアート作品を中川運河の空間に演出した。会場とされたのは、小栗橋・長良橋付近の倉庫および前面の運河水面である。チャンネルアートの試みは、異分野・異業種の有志の集まりから自発的に生まれた手づくりの活動が、試行錯誤の末に、中川運河の水面と倉庫空間に絡むアート活動の実践を多くの市民に向けて提示することに成功したという意味で、以後の活動に大きなインパクトを残したと言えるだろう。

同じ時期には、アートポートで重要な役割を果たした名古屋大学の茂登山清文教授が、名古屋国際デザインセンターなどと連携して、プロジェクト「中川運河写真」を実施した。プロジェクトの一環として行われた市民参加のワークショップでは、参加者自らが写真の撮影・編集を行うことで、人々の間に中川運河の風景と向き合う新しい感性を生み出すことが試みられた。プロジェクトの成果を受けて、2012年3月には、名古屋都市センターでの写真アートの展覧会と併せて、写真集が出版（茂登山・則武，2012）された。なお、先立つ2006～2010年には、NPO法人・伊勢湾フォーラムの主催により、中川運河フォトコンテストが実施されている⁴⁾。

2. 中川運河再生計画

以上のような動きが展開するなかで、2012年10月、名古屋市・名古屋港管理組合の「中川運河再生計画」が策定される⁵⁾。同計画は、およそ20年先の中川運河を展望しつつ「交流・創造」「環境」「産業」「防災」の4本柱からなる再生構想を提示し、都心から港に向けて、「にぎわいゾーン」「モノづくり産業ゾーン」「レ

クリエーションゾーン」の3つのゾーンを設定した。このなかで、とくに「にぎわいゾーン」設定（前掲図1参照）の考え方について、計画書は次のように説明する。

…堀止ゾーンは、名古屋駅やささしまライブ24地区に近く、集客のポテンシャルが高い地区であり、運河回遊の導入エリアとしての役割が求められます。また、堀川との接続点には、運河の歴史を物語る松重閘門が存在しています。長良橋ゾーンは、製造・物流・業務などの産業機能が残るゾーンですが、運河上流部で唯一幅員90mの広大な水辺空間であり、近年は歴史のある倉庫群を活用した市民団体の芸術的なイベントが開催されるなど、運河の魅力を発信するにふさわしい水辺景観を形成しています。そこで、基本計画における堀止ゾーンと長良橋ゾーンを一体として「にぎわいゾーン」と位置づけます。〔「中川運河再生計画」44頁〕

そのうえで、「にぎわいゾーン」の再生イメージについて、以下のように述べている。

ささしまライブ24地区の開発と連携し、緑地・プロムナードの設置や、沿岸用地へのカフェ、レストラン等にぎわい施設の誘導、水上交通の運航などを展開して、運河の魅力と回遊性を高めるとともに、運河の歴史や文化・芸術を楽しむ市民活動の継続的な実施を通じ、都心地域に集まる人びとが訪れたいくなるような「港と文化を感じる都心のオアシス」の形成をめざします。〔同47頁〕

「港と文化を感じる都心のオアシス」は、どのようにすれば創出できるのか。そのための布陣としての位置づけを与えられたのが、市民団体や大学が行政と連携しながら進めてきたアート活動にほかならない。

2013年、名古屋市の主要外郭団体の一つ、名古屋都市センター（公益財団法人名古屋まちづくり公社）は、運河近傍に本社を構えるリンナイ株式会社からの寄附を原資として、「中川運河再生文化芸術活動助成事業」（愛称：中川運河助成 ARToC10）を立ち上げた⁶⁾。ARToC10の「10」は助成期間の10年間を意味し、毎年1000万円、10年間で1億円の資金投入が予定された。助成金は1団体につき数百万円規模であり、2016年度までの4年間は、いずれの年度も3団体が選定されている（表1）⁷⁾。ARToC10が立ち上がったことを契機に、散発的な試みにすぎなかった中川運河のアート活動は、より多くの主体が参加する継続的な

活動へと展開するきっかけを得たと言えるだろう。

ARToC10の募集要項は、以下の4つの視点から事業提案を評価することを明示している。

視点1：にぎわい 「にぎわいゾーン」におけるにぎわい創出につながる内容か。

視点2：「場」を活かす 中川運河の場の特性を活かした内容か。

視点3：文化芸術性 文化的価値があり、芸術性が高い活動か。

視点4：実現性 事業スケジュール、予算は具体的かつ妥当か。

4つの視点に優先順位が設けられているわけではないが、文化芸術性や実現性といった常識に沿った評価基準よりも、にぎわい創出と場の特性が目立つ位置に置かれていることは、ARToC10が期待するアートのあり方を示唆する。このほか、募集条件のなかで事業内容に大きく影響する点としては、名古屋市内に在住または在勤する個人、またはこの条件を満たす者を構成員に含む団体に応募者が限定されていることが特筆される。併せて、事業の実施場所については、応募者自らが運河沿い事業者などと交渉して確保するよう求めていることにも注目しておきたい。

以下では、2013～2015年度の3年間にARToC10の助成を受けて活動した4団体（表1）に焦点を当てて、インタビュー調査の結果を軸に考察を進める。

III 活動主体へのインタビュー調査

調査では、先述の4団体で中心的役割を担う人物に対してインタビューを行うとともに、中川運河で活動する地元出身のアーティスト1名を調査対象に加えた。併せて、アート活動を支援する企業からもインタビューへの協力を得た。各インタビューの内容は、①活動のねらい、②中川運河とアートの関係、③中川運河再生への考え方の大きく3つの柱からなる。質問項目は一通り事前に用意したが、調査時には、会話を通じて協力者の問題関心を探る動的なインタビュー方法をとった。

1. 清水裕二氏（中川運河チャンネルアート）

建築家の清水氏は、愛知淑徳大学教授として教鞭を執る傍ら、2013年から、服部充代氏のあとを継いで中川運河チャンネルアート実行委員長を務めている。清

表1 ARToC10による助成団体（2013～2015年度）

2013年度	
一般社団法人 中川運河チャンネルアート	チャンネル・マルクト・フェスタ
有限会社 シネマスコーレ	Moosic in 中川運河
伏木啓	中川運河映像アーカイヴプロジェクト
2014年度	
伏木啓 + 木田歩	中川運河映像アーカイヴプロジェクト
一般社団法人 中川運河チャンネルアート	Nature/Landscape/Human
N-mark	中川運河リミコライン・アートプロジェクト
2015年度	
有限会社 シネマスコーレ	Filmusic in 中川運河・夏
伏木啓 + 木田歩	中川運河映像アーカイヴプロジェクト
N-mark	一水辺に生息するアートー limicoline Art Project

（資料）名古屋都市センターの資料による。

水氏の中川運河での活動は、チャンネルアート立ち上げのさいに知り合いから誘われたことをきっかけに始まったという。建築家として倉庫空間の可能性に強い関心をもった清水氏の語りを、以下、インタビュー記録をもとに再構成する。

<活動のねらい>

チャンネルアートの出発点は、ニューヨークに住んでいた服部充代さんが、帰国後、存在すら知らなかった中川運河を偶然「発見」したことにある。服部さんは、ニューヨークでギャラリーに転用された倉庫や水辺のにぎわいを目の当たりにした経験から、名古屋の貴重な水辺である中川運河を活用し、魅力的な空間に変えたいと思い立った。

チャンネルアートは、2010～2014年の5年間、多くのアーティストを呼んで、中川運河でアートイベントを開催してきた。あくまでイベントを企画・運営する立場であり、自らアートを行うわけではない。音楽、舞踏、映像など、さまざまな角度から中川運河にアプローチし、その舞台性の発見を試みてきた。

チャンネルアートは、ARToC10の立ち上げに関わり、2013年と2014年は、助成団体の一つに選定された。しかしその後、アートを手段とすることで中川運河を多くの人に知ってもらい、水辺空間のにぎわいを創出する



写真1 中川運河チャンネルアート

中川運河チャンネルアートは、2010～2014年の毎年秋、映像、音楽、舞踏などのアーティストを呼んで、倉庫や水辺を舞台とするアートイベントを開催した。写真は、Project No.2(第3回)におけるチェロとダンスのコラボレーション企画「時を超えて語り継がれる音楽と舞踏の光と影」(中木健二+山田茂樹)。2012年10月清水裕二撮影。

というチャンネルアート本来の目的に照らして、活動のあり方を考え直した。結果として、アーティストと競合して自らARToC10に応募するよりも、中川運河に関心を寄せるアーティストを後方から支援する立場へシフトするのが適切と考え、2015年からは応募しないことになった。

<中川運河とアート>

アートは、一つのブランディングとしての意味をもち、都市に文化を根づかせることができる。たとえば京都は、歴史ある町の雰囲気という価値をもっているため、新しいものでも人を集めることができる。商業施設は飽きられたら集客力を失うが、文化があれば人は来る。中川運河の独特の空間をいかせば、水辺を楽しむことができ、わざわざ行きたくない場所をつくり出すことができるだろう。そのためには、アーティストが来ることで、人々にふだん気づいていない、何か違うものを感じてもらうのがよいと思う。まず、アーティストが気づき、それを広めることによって、一般の市民にも中川運河の魅力に気づいてもらえるのではないかと。

<再生への考え方>

運河に面する空間の特性といったことも意識して、雰囲気や独自性を大切にしなければならない。その独自性をいかすことがにぎわいを生むと思う。今ある独自性を維持しながら、新しいものを入れられたら、それは新しい価値になる。戦争によって古いものがほとんど残っていない名古屋において、中川運河は80年の歴史をもつ

場所。歴史のある場所を普通にしてしまっはまずいのではないかと。

にぎわいは、市民のなかでつくられてゆくもの。最近の変化をみると、倉庫などの独特の風景がどこにでもある商業施設に置き換わってしまったという感じがする。これまでの雰囲気を残しながら、どのようにすればいいのか、誰もが模索している状況である。

(調査日：2015年5月25日)

2. 武藤勇氏 (N-mark)

コンセプチュアル・アートの作家であり、ディレクターとしても活躍する武藤氏にとって、町のなかに溶け込み、そこで生活する人々と関わり合うことは、アート活動の不可欠な一部である。アーティスト支援の拠点として、1998年に仲間とN-markを設立し、2012年からは、名古屋の長者町トランジットビルにアートスペースを構える。武藤氏にとって、中川運河で始めたプロジェクトは、アートポートの活動から繋がる名古屋港エリアへのアプローチとしての意味をもっている。

<活動のねらい>

limicolineは、「水辺に生息する」という意味の造語。中川運河に少しずつアートが根づいていくようにという思いが込められている。プロジェクトのねらいは、アートという手法を用いて、運河の魅力や新たな発見、そして運河に関わる人々の思いを、目に見えるカタチにすること。そのために、お借りした森石油ビルの2階を活動拠点「中川運河アート&リサーチラボ」に仕立てた。ここで、イベント期間中の週末ごとに、アート作品の展示にフィールドワークやワークショップなど、参加型の企画を組み合わせてやってきた。

<中川運河とアート>

中川運河は工場などが多く、まちづくりとか、そういう感じがしない場所。コミュニティが解体されていて、住民の交流がないようにみえる。時間的にも浮いた感じがする。どういう住民をつくっていくべきか。そういう普遍的な問いと向き合う場所だと思う。

アートは、そこにある美しいものや難しい問題をビジュアル化し、後世に残す働きができるメディア。都市中心部の水辺空間でありながら、中川運河には、手つかずゆえの魅力がある。そういう場所で、文化的にどのように立ち向かっていけるのかを実践するところに、アート活動の意味がある。中川運河でしかできない大人の遊び



写真2 Limicoline Art Project

2014年に始まったLimicoline Art Projectは、中川運河東支線にあるガソリンスタンドのこじんまりとした社屋を拠点とする。地元アーティストの参加による継続的な活動の周りに、近隣住民を巻き込もうと試みてきた。写真は、中川運河の一部の護岸築造に使われた人造石「長七たたき」の技術と造形を空間づくりにいかした「中川茶屋」。2014年11月横関浩撮影。

から、アートが生まれてゆく。だから、limicolineでは、一般的な芸術の枠にとらわれず、手づくりのカナディアンカーを運河に浮かべたり、中川運河ブレンドコーヒーを試作するなど、中川運河を人々の文化的な生活のリズムに組み込むことをめざしてきた。それが、どのようにアートに変わってゆくか。

ただ、今の中川運河の仕組みでは、アートをやるという掛け声はあっても、それを実現するための場所が開放されていない。たとえば横浜は、市としてのクリエイティブシティ構想をもっているが、名古屋では一部の人の間にしかない。愛知県や名古屋市としてのブランディングが機能しておらず、クリエイティブなものもできたとしても、それをいかしてゆくシステムがない現状に問題を感じている。

<再生への考え方>

地元の人たちが無償で場所を提供してくれるようになったことが、プロジェクトの大きな成果だと思う。地元の情報が集まるガソリンスタンドの事務所をお借りできたおかげで、オーナーの森夫妻がお客さんを連れてきてくれる。森さんの仕事の中に「寄生」するようなかたちで一体化したというか。森さんを通じて、いろいろな人がアートにふれてくれたら嬉しい。大事なのは、中川運河を取り巻く人々の生活に文化を位置づけること。そのためには、アーティスト自らが中川運河に身を置き、アートを定着させることが必要だと思う。

中川運河でクリエイティブになれるためのモチベーションをつくることで、ここに来たいという人を増やした

い。活動場所が限られていて、規制もあるから、アートだけでは難しいかもしれない。それでも、中川運河に来る理由をデザインして、カルチャーをつくりたい。いつでもやめられるような状態では、開発が起きたときに負けてしまう。使い捨てられる危険の方が大きいけれども、やれるだけやろうと思っている。

〔調査日：2015年8月20日〕

3. 伏木啓氏／木田歩氏（中川運河映像アーカイヴプロジェクト）

名古屋学芸大学で教える伏木氏は、映像メディアを中心とする分野の人材育成に力を注ぐ一方、アーティストとして精力的な制作活動を続けてきた。中川運河映像アーカイヴプロジェクトでは、中川運河の風景を映像化し、近隣住民への取材で得た言葉と併せてアーカイヴしている。これを再構成し、インスタレーション作品としたのが、2013～2015年に長良橋近くで公開された「waltz」である。インタビュー調査では、伏木氏とともに、プロジェクトマネージャーの木田氏からも協力を得ることができた。

<活動のねらい>

水の上は、土台が物理的に揺らぐ新しい環境。圧倒的な身体性を感じる。美術館やギャラリーとは異なるイレギュラーな、非日常的な場所だし、歴史的なものが少ない名古屋では、戦火を免れた中川運河は異質な場所だと思う。都市の中心にありながら、忘れ去られたような、歴史的背景をもちつつも、時間が止まっているような感じ。題材として、とても魅力的に感じる。

中川運河のアート活動は、都市計画と隣接しているがゆえに面白く、また、それが難しいところでもある。都市整備の状況次第で、今年使えても来年は使えないということが起きる。場所によってできることが変わってくる。方法も、雰囲気も。

映像アーカイヴプロジェクトでは、中川運河の風景の断片やそこに住んでいる、または住んでいた人たちへの取材を記録して作品化してきた。少なくとも月に1度は撮影に行くようにしている。一年を通じた移り変わりがあるし、一日のなかでも見られる顔が違う。ただし、変化してゆくことに対して、どうこう言おうというのではない。今の段階では、変化も含めて記録を続けている。リンナイの旧部品センターで働いていた人たちを知ることができたのは、とてもよかった。

工場や倉庫のある場所だから、働きに来ている人が多く、アートに関心があるわけではない。しかし、そ



写真3 中川運河映像アーカイブプロジェクト

映像インスタレーション作品「waltz」は、中川運河の風景と人々を収録したアーカイブを再構成し、水上に浮かべたスクリーンに背後からプロジェクターで映像を投影する独創的な試みである。写真は、3回目にあたる「waltz 2015」の様子を長良橋から都心を背景にとらえたもの。2015年11月竹中撮影。

う人たちの日常に非日常を与えたいからこそ、waltzは平日にもやるようにした。

<中川運河とアート>

中川運河に限らないが、社会におけるアートの役割は、単純に言ってしまうと、ガス抜きのようなものではないか。たとえば、資本主義社会のなかでは、ほとんどの行為やモノが経済活動の循環に組み込まれている。そういうサイクルに疑問をもつとか、疑問という明確な思いでないにせよ、ふっと湧いてくる欲求をなんらかの形や行為とするところに、アートの価値があると思う。

waltzを繰返し行ううちに、鑑賞者が変わって、高齢者も増えた。工場や事業所の人たちも、2年目からは協力してくれるようになった。ただ、昨年(2014年)はテレビで放送されたので、イベント的になってしまった。「にぎわい」がキーワードではあるのだけれども、去年は本当ににぎわってしまい、違和感があった。一過性のイベントとして消費されてしまうのは、アートとして本意ではない。理想は、その辺にいる人たちが、日常のなかでいつもと違うものに出会うこと。地域にアクセントを与えたい。

<再生への考え方>

自分にとっては、地域のことを前提にすると、アートとして成り立たなくなる。地域との繋がりは、電源を貸してもらったり、駐車場を貸してもらおうとか、そういうことのなかで自然に生まれる副次的なものだと思う。だから、地域に貢献しようとか、まちおこし、再生のような一般的な文脈には、あえて乗らないようにしている。

地域を活性化させるというのはもっと大きなことで、アートプロジェクトそのものの目的ではないと思う。

取材していて改めて思うのは、住んでいる人たちは、中川運河を特別視していないということ。だから、自分たちも、アートを通してたんに作りたいものを作るといった関わりの方が誠実かなと感じる。すでに価値があり、それぞれの人が価値を見出していて、それを使わせてもらっているだけ。だから、「にぎわせよう」と思うこと自体がおこがましい。

(調査日：2015年9月15日)

4. 木全純治氏(シネマスコーレ)

シネマスコーレは、映画監督・若松孝二が1983年に名古屋駅西口近くに開いた映画館である。いわゆるミニシアターの一つとして、シネマコンプレックスでは上映されない、目の肥えた愛好家向けの映画を届けることを旨としてきた。木全氏は、この映画館の代表取締役を務める。2013年と2015年には、自らが先導して、ARToC10の助成による短編映画制作に取り組んだ。

<活動のねらい>

シネマスコーレとして、中川運河で以前から活動していたわけではないが、ARToC10の募集を見て、映画制作を思い立った。助成金のおかげで、オリジナルな曲が作れるし、整音などもきちんとして、レベルが違ってくる。2015年のテーマは、「運河・音楽・夏のシーン」。

運河を重視しているから、中川区の人たちにもエキストラとして参加してもらっている。2013年に募集したときは中川区民が多く、県外からの応募はなかった。2015年には、東京からも20名くらいの応募があった。制作にさいしては、東京から監督が何度も中川運河に足を運んで、イメージを形にしていた。

映画は記録性をもっている。2013年は冬、2015年は夏の情景を撮った。10年単位で考えると面白いし、記録として価値が出てくる。映像は残るから、恒久的なものを作った方がよい。大変だから毎年は無理だけれども、10年間の蓄積としてどうなるのかを意識しながら取り組んだ。

<中川運河とアート>

中川運河は、物流で利用するためにわざわざ掘った特殊な場所。川幅が広く、水量が豊かで、静かな水面に特徴がある。人があまりいない倉庫街で、見捨てられた感じなのが、映画には合っている。



写真4 Filmusic in 中川運河・夏

名古屋駅西に映画館を開くシネマスコアによる「Filmusic in 中川運河・夏」は、中川運河の雰囲気の中で「起こりそうなこと」を物語化した。「運河・音楽・夏」を共通テーマとしつつ、多くの作品で運河を再生の場所として描き出している。写真は、小栗橋南での撮影風景。「中川運河助成 ARToC10」Facebook の掲載写真。

<再生への考え方>

中川運河のあの風景が残ってゆくのが理想だと思う。企業的なモノをつくってはダメ。現代アートとか、ふだん見られないものが見れる場所になってほしい。アートを見てもらうことが新しい動きに繋がり、行政にも新たな発想が湧いてくるのではないかな。企業がお金を出してくれるのは貴重な機会なので、あの場所がよい方向に変わればと思う。

ただし、運河に接している道は名古屋市の持ち物で、そこにファミレスなどができたら、もう終わり。ファミレスのにぎわいではなく、何のために中川運河に人が来るのが大切で、再生してゆくときも、心休まる空間であってほしい。利潤を考えないで、運河と倉庫だけあればよい。それだけで面白いから。注意しなければ、運河としての特質がなくなってしまう。

〔調査日：2015年12月3日〕

5. 浅井信好氏（舞踏家）

浅井氏は、中川運河の小栗橋近くで生まれ育った舞踏家である。コンテンポラリーダンサーとして、ヨーロッパを中心とする国際舞台で活躍し、2013年には、パリを拠点にダンスカンパニー「ピエールミロワール」を創設した。2011年から中川運河チャンネルアートの活動に協力し、2度にわたって公演を行った。2016年度のARToC10では、ピエールミロワールによる「月灯りの移動劇場」が採択事業の一つとなっている。

<活動のねらい>

チャンネルアートを引っ張っていた服部充代さんのツイ

ッターを見て、何か手伝いたいとこちらから声をかけたことがきっかけで、中川運河での自分の活動が始まった。

チャンネルアートで2回目の公演（倉庫内スペクタクル＋水上パフォーマンス）を行ったときは、プロデューサーとして関わった。多くの人とディスカッションや共同作業を重ねてゆくなかで、以前とは違うものが見えてきた。その場所に身を置いてつくることができたのは大きかったと思う。最初は考えていなかったリンナイ旧部品センターを会場に選んだ。それに、水上ステージを製作した愛知淑徳大学の学生やオーディションで選んだ名古屋のダンサーなど、自分より若い世代の人と一緒に作りあげるなかで、「この人たちの思いをかたちにしてあげたい」と思い、未来について考えるようになった。⁸⁾

作品をつくるうえで、中川運河だから特別に気をつけていることはない。しかし、可能なら職人さんと何かしたい。それに、もっと一般の人たちが楽しめるものを作りたい。

<中川運河とアート>

夜暗く、ときどき臭く、夕日が綺麗。どこまで行っても、中川運河は中川運河。自分は、地元なので客観視できないから、再発見した人たちに手助けしてもらい、新しい価値を教えてもらうことで、一つひとつ認識してゆく段階にある。

中川運河でのアートについては、まず目撃することが大切で、何を目的に来てもらってもいい。芸術は、中川運河を知ってもらうための広告のようなもの。そこににぎわいも生まれてくる。まずは浅いもので人に来てもらい、お客さんを育てた後、深い作品を作る。お客さんを置き去りにする作品はダメで、共に育とうという意識が必要だと思う。

<再生への考え方>

同級生たちには、町工場の2代目、3代目が多い。そういう人たちとアーティストがコラボレーションして、ここでしか生み出せない、サイトスペシフィックなものを作りたい。それは工業にもアートにもいさせる。運河とか倉庫よりも、ものづくりが中川運河の価値。アーティストは町工場を再発見し、子どもたちは親の仕事のよさを見つける。それは「かっこいい」ことだと思う。B to B（企業間取引）からB to C（企業と消費者の取引）にすることで産業の発展も望めるし、それにはアートも大切ではないか。

中川運河に1年を通じて活動できる場所ができるといい。研究者やアーティストなど、さまざまな人がコミ



写真5 「あわい (Betweenness-Encounter)」

浅井信好氏のこの作品は、中川運河チャンネルアートとの共同プロデュースによるもの。チャンネルアート Project No.4 の目玉として披露されたのち、パリで初演となった。お披露目のさいには、前半が鉄骨が剥き出しのリンナイ旧部品センター、後半は運河の水面上ステージで演じられた。2014年11月大洞博靖撮影。

ユニケーションを取れる場。たとえば隅田川は、汚さが同じくらいの水辺だが、東京と名古屋の町のポテンシャルが違う。中川運河の場合、教育、アーティスト、行政などの連携が取れていないうえにバランスが悪く、柔軟性が少ない。中川運河自体が成熟しておらず、誰もイニシアティブが取れていない。今のままでは無理だが、本気で動き出せば何か起きるかもしれない。まず、若い人たちに ARToC10 を使ってもらって方向転換をはかる必要がある。リンナイだけではなく、さまざまな助成を得て、長期間アートができるような運営体制をつくるといいと思う。

(調査日：2015年11月17日)

6. 小澤勝志氏 (リンナイ株式会社)

小澤氏は、リンナイ株式会社の広報室に勤務し、企業の立場から、中川運河の未来に向けた支援活動に携わっている。

<活動のねらい>

自分は、中川運河との関わりをとくにもっていなかったが、助成活動に携わるうちに、運河に対する愛着が湧いてきた。

企業とアーティストには、ものをつくるという共通点がある。さらに、内藤社長の「文化の香りのするまちにしたい」「人がまた来なくなるまちにしたい」という思いがあった。そうした一致点から、助成のための支援が始まった。現代アートはそのための手段であり、会社として、中川運河再生計画にも賛同している。

<中川運河とアート>

昔は暗く、ホームレスもいて、子どもには近づいてほしくないような場所だった。アートをやっても盛り上がる場所ではないというイメージがあった。しかし、今では、静謐さと共存する雑多な感じ、長良橋からの風景、川幅の広さが魅力的だと思っている。ガヤガヤワイワイしているようなにぎわいは、名古屋駅とか栄に任せておけばよい。町の喧噪がBGMで、静かな方が中川運河には合う。中川運河の倉庫は、組立てや出荷の場として、最も効率的な姿をしている。新しくどこにでもあるものと同じになっては、魅力が損なわれる。

リンナイの設計や開発の人と絡むと、何か新しい視点やモノが生まれるかもしれない。日本では、芸術がまだ生活に組み込まれていない。しかし、ARToC10のもとでの活動を3年間見てきて、お客さんが増えたと感じる。広がりはできつつあると思うので、3年間やってきてよかった。伏木さんの作品などは、中川運河の風物詩になりつつある。

<再生への考え方>

世界の人に中川運河は芸術をやっている場所だと認識されてほしい。今後、運河はハード的に変わらと思うが、ソフト面も大切。行けば面白いことがある施設がいくつかできるとよいと思う。

ただ、会社としては、お金を出す以外はまだまだ何もできていない。旧部品センターを活動のために何度か貸したが、集会場への用途変更を求められて行き詰ってしまった。会社としての本業ではないので、やり方に悩んでいるのが現状である。人が集まる場として倉庫を使おうとすれば、防火設備などが必要になるし、利益を生まないものに投資するのは難しい。社会貢献などのメセナの考え方が育っていないという問題がある。後世の人の利益のために開放できたら、と個人的には思うが。

(調査日：2015年11月17日)

IV 調査結果の比較分析

助成制度のもとで定着してきたように見える中川運河のアート活動は、期待されたように、運河再生に向けた突破口になりえているだろうか。前節でみた活動主体へのインタビュー調査の結果は、アーティストやそれを支える主体の視点から、少なからぬ示唆を与えるものと思われる。

以下、冒頭の問題設定に立ち戻って、アート活動が中川運河と向き合う人々に価値観の転換を促したか、



写真6 リンナイ旧部品センターでのPRイベント

リンナイ旧部品センターは、長良橋の北西、広川町4丁目にある。いくつものアーティスト・アート団体がこの場所を舞台として、また活動拠点として活用することができたのは、企業としての懐の広さによるものであろう。写真は、2015年8月29日に開催されたARToC10のPRイベントの様子。竹中撮影。

また、中川運河に文化へのアクセスを通じた交流空間を生み出したか、という2つの問いに即して検討する。そのうえで、アートを中川運河再生に向けた有効な一歩とするために克服すべき課題は何かについて、インタビューを通じて表明された活動主体の認識を探ってみたい。

1. 価値観の転換

協力者はいずれも、アート活動をデザインするさいに、中川運河の雰囲気をつくる固有の空間文脈をはっきりと意識している（表2）。そのことは、「人があまりいない倉庫街で、見捨てられた感じなのが、映画には合っている」という木全氏の言葉に集約される。ARToC10が掲げる「場」をいかした、サイトスペシフィックな性格の濃いアートというコンセプトは、これまでの試みを通じて具体的な姿かたちを与えられた、とひとまず評価できそうである。しかし、協力者らの語りの中身に踏み込むと、アートと中川運河の関係の結び方をめぐって、いくつかの異なる考え方が存在することに気づく。

一つは、中川運河そのものを作品のモチーフにするという発想である。とくに、インスタレーション作品では、アーティスト自らによる運河の身体的な経験から作品が着想され、出来上がった制作物が生の運河空間のなかに置かれる。さらに、運河が制作のモチーフになるだけでなく、多くの人々が作品の鑑賞を通して運河と繋がる感覚をもつことができる。この意味で、「水の上は、土台が物理的に揺らぐ新しい環境。圧倒的な身体性を感じる」という伏木氏のコメントは、き

わめて示唆的である。水上スクリーンに中川運河の映像を映し出す waltz は、アート作品という仕掛けを水面に置くことで、アーティストと中川運河の出会いを表現すると同時に、運河とそれを取り巻く人々の関係性にも働きかけるものと言えるだろう。

さらに一歩進んで、場所から得た着想をもとに自ら作品を制作する一方で、活動の場を用意することで仲間を増やし、アートを町に根づかせようと試みるアーティストもいる。これは、アートを求める市民の感性に働きかけることで、人々と運河の関わり合いの接点を広げる意味をもつ。西日置の町で市民参加型のイベントを展開する武藤氏は、「運河の魅力や新たな発見、そして運河に関わる人々の思いを、目に見えるカタチにする」というわかりやすい言葉で、プロジェクトのねらいを説明している。

もう一つの発想は、作品のモチーフというよりも、アートの舞台としての中川運河の可能性に注目し、その活用から運河の魅力発信へ繋げるというものである。「音楽、舞踏、映像など、さまざまな角度から中川運河にアプローチし、その舞台性の発見を試みてきた」という清水氏のコメントは、中川運河をプロモートしようとするチャンネルアートの立ち位置を端的に言い表している。もちろん、舞台性の発見と一口に言っても、その根本に、市街地のなかに唐突に挿入された港湾空間が醸し出す時空間的なギャップの感覚といった、運河空間が有する固有性への価値づけがあることは言うまでもない。さらに、チャンネルアートにも出演した浅井氏は、アートは「中川運河を知ってもらうための広告のようなもの」と述べつつ、作家として、町工場やそこで働く職人たちとの協働に、中川運河ならではの価値創造の可能性を予見している。

以上のように、ARToC10の助成を受けたグループの間でも、作品やその制作プロセスに中川運河を取り込むのか、あるいは作品の舞台装置として中川運河を際立たせようとするかで、重みの置き方が異なる。ならば、中川運河を見る人々の視線やその背後にある価値観の転換を積極的に追求するうえで、いずれかのアプローチがより有効ということはあるだろうか。

中川運河に外部からの視線を引き寄せるといった観点にたてば、舞台性の徹底的な追求が効果的と言えるかもしれない。それは、「アーティストが気づき、それを広める」（清水氏）、「まずは浅いもので人に来てもらい、お客さんを育てた後、深い作品を作る」（浅井氏）といったコメントに表れるとおりである。しかし、中川運河の存在感が低下したそもその理由の一つは、

表2 インタビュー結果の比較検討 (1): アートによる価値の転換

<p>【清水裕二氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽、舞踏、映像など、さまざまな角度から中川運河にアプローチし、その舞台性の発見を試みてきた。 ・アーティストが来ることで、人々にふだん気づいていない、何か違うものを感じてもらおうのがよいと思う。まず、アーティストが気づき、それを広めることによって、一般の市民にも中川運河の魅力に気づいてもらえるのではないか。 ・今ある独自性を維持しながら、新しいものを入れられたら、それは新しい価値になる。戦争によって古いものがほとんど残っていない名古屋において、中川運河は 80 年の歴史をもつ場所。歴史のある場所を普通にしてしまっはまずいのではないか。
<p>【武藤勇氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトのねらいは、アートという手法を用いて、運河の魅力や新たな発見、そして運河に関わる人々の思いを、目に見えるカタチにすること。 ・アートは、そこにある美しいものや難しい問題をビジュアル化し、後世に残す働きができるメディア。都市中心部の水辺空間でありながら、中川運河には、手つかずゆえの魅力がある。そういう場所で、文化的にどのように立ち向かっていけるのかを実践するところに、アート活動の意味がある。
<p>【伏木啓氏／木田歩氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水の上は、土台が物理的に揺らぐ新しい環境。圧倒的な身体性を感じる。美術館やギャラリーとは異なるイレギュラーな、非日常的な場所だし、歴史的なものが少ない名古屋では、戦火を免れた中川運河は異質な場所だと思う。都市の中心にありながら、忘れ去れたような、歴史的背景をもちつつも、時間が止まっているような感じ。題材として、とても魅力的に感じる。 ・理想は、その辺にいる人たちが、日常のなかでいつもと違うものに出会うこと。地域にアクセントを与えたい。
<p>【木全純治氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中川運河は、物流で利用するためにわざわざ掘った特殊な場所。川幅が広く、水量が豊かで、静かな水面に特徴がある。人があまりいない倉庫街で、見捨てられた感じなのが、映画には合っている。 ・中川運河のあの風景が残ってゆくのが理想だと思う。企業的なモノをつくってはダメ。現代アートとか、ふだん見られないものが見れる場所になってほしい。アートを見てもらうことが新しい動きに繋がりが、行政にも新たな発想が湧いてくるのではないか。
<p>【浅井信好氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中川運河でのアートについては、まず目撃することが大切で、何を目的に来てもらってもいい。芸術は、中川運河を知ってもらうための広告のようなもの。そこににぎわいも生まれてくる。まずは浅いもので人に来てもらい、お客さんを育てた後、深い作品を作る。 ・同級生たちには、町工場の 2 代目、3 代目が多い。そういう人たちとアーティストがコラボレーションして、ここでしか生み出せない、サイトスペシフィックなものを作りたい。それは工業にもアートにもいさせる。運河とか倉庫よりも、ものづくりが中川運河の価値。アーティストは町工場を再発見し、子どもたちは親の仕事のよさを見つける。それは「かっこいい」ことだと思う。
<p>【小澤勝志氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本では、芸術がまだ生活に組み込まれていない。しかし、ARToC10 のもとでの活動を 3 年間見てきて、お客さんが増えたと感じる。広がりはできつつあると思うので、3 年間やってきてよかった。伏木さんの作品などは、中川運河の風物詩になりつつある。

(資料)インタビュー調査にもとづいて作成。

運河を生業の場とする人が減少したことにある。とすれば、近隣で生活する人々と運河の関係を活性化し、新たな関わり合いの動機づけを与えるためのメディアとして、作品の制作プロセスそのものに運河の存在を内部化させるアートがもつ価値を軽視することはできないだろう。

2. 交流空間の創出

次に、文化へのアクセスを通じた交流空間の創出について、同様にインタビュー調査の結果をもとに検討してみよう (表 3)。

協力者全員にほぼ共通するのは、たんに作品の周りに鑑賞者を引き寄せるのではなく、アートへの関心をきっかけとして集まった人々の間にコミュニケーションを生み出そうとする意識である。このため、主たる関心は、量的な動員力よりも生み出される交流の質に向けられる。「商業施設は飽きられたら集客力を失うが、文化があれば人は来る」(清水氏)、「ファミレス

のにぎわいではなく、何のために中川運河に人が来るのかが大切」(木全氏)などのコメントは、集客そのものを目的化したにぎわい施設の設置ではなく、運河と関わるための動機づけをデザインすることにこそ、かれらのイメージする運河再生の道筋があることを示唆する。伏木氏による「去年は本当ににぎわってしまい、違和感があった」「にぎわせよう」ということ自体がおこがましい」という語りも、アーティストとして、にぎわいづくり自体を目的化していないことを率直に表現したものと解釈できる。

もともと、アートに関心のある人が集まり、自然に交流が生まれるというのは、いささか抽象的にすぎる筋書きであり、言葉どおりに実現するのは簡単でない。中川運河に「どういう住民をつくっていくべきか、そういう普遍的な問いと向き合う場所」を見出す武藤氏は、「中川運河でしかできない大人の遊びから、アートが生まれてゆく」と言う。「中川運河に身を置く」アーティストの活動は、地域社会のエンパワーメント

表3 インタビュー結果の比較検討(2): 交流空間の創出

<p>【清水裕二氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・商業施設は飽きられたら集客力を失うが、文化があれば人は来る。中川運河の独特の空間をいかせば、水辺を楽しむことができ、わざわざ行きたくなる場所をつくり出すことができるだろう。 ・にぎわいは、市民のなかでつくられてゆくもの。最近の変化をみると、倉庫などの独特の風景がどこにでもある商業施設に置き換わってしまったという感じがする。
<p>【武藤勇氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中川運河は工場などが多く、まちづくりとか、そういう感じがしない場所。コミュニティが解体されていて、住民の交流がないようにみえる。時間的にも浮いた感じがする。どういう住民をつくっていくべきか。そういう普遍的な問いと向き合う場所だと思う。 ・中川運河でしかできない大人の遊びから、アートが生まれてゆく。だから、limicolineでは、一般的な芸術の枠にとらわれず、手づくりのカナディアンカヌーを運河に浮かべたり、中川運河ブレンドコーヒーを試作するなど、中川運河を人々の文化的な生活のリズムに組み込むことをめざしてきた。それが、どのようにアートに変わってゆくか。 ・大事なのは、中川運河を取り巻く生活のなかに文化を位置づけること。そのためには、アーティスト自らが中川運河に身を置き、アートを定着させることが必要だと思う。
<p>【伏木啓氏/木田歩氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・waltzを繰返し行ううちに、鑑賞者が変わって、高齢者も増えた。工場や事業所の人たちも、2年目からは協力してくれるようになった。ただ、昨年(2014年)はテレビで放送されたので、イベント的になってしまった。「にぎわい」がキーワードではあるのだけれども、去年は本当ににぎわってしまい、違和感があった。一過性のイベントとして消費されてしまうのは、アートとして本意ではない。 ・すでに価値があり、それぞれの人が価値を見出して、それを使わせてもらっているだけ。だから、「にぎわせよう」ということ自体がおこがましい。
<p>【木全純治氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運河を重視しているから、中川区の人たちにもエキストラとして参加してもらっている。2013年に募集したときは中川区民が多く、県外からの応募はなかった。2015年には、東京からも20名くらいの応募があった。制作にさいしては、東京から監督が何度も中川運河に足を運んで、イメージを形にしていた。 ・ファミレスのにぎわいではなく、何のために中川運河に人が来るのかが大切で、再生してゆくときも、心休まる空間であってほしい。
<p>【浅井信好氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水上ステージを製作した愛知淑徳大学の学生やオーディションで選んだ名古屋のダンサーなど、自分より若い世代の人と一緒に作りあげるなかで、「この人たちの思いをかたちにしてあげたい」と思い、未来について考えるようになった。 ・中川運河に1年を通じて活動できる場所ができるという。研究者やアーティストなど、さまざまな人がコミュニケーションを取れる場。
<p>【小澤勝志氏】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の人に中川運河は芸術をやっている場所だと認識されてほしい。今後、運河はハード的に変わらと思うが、ソフト面も大切。行けば面白いことがある施設がいくつかできるとよいと思う。

(資料)インタビュー調査にもとづいて作成。

にとっても、重要な働きをするという発想であろう。だからこそ、カナディアンカヌーや中川運河ブレンドコーヒーといった、一見アートと関係の薄そうな試みから始めて、「それが、どのようにアートに変わってゆくか」を見届けるという姿勢に説得力が生まれる。

もう一つ見逃せないのが、作品づくりそのものに協力する人々の存在である。「水上ステージを製作した愛知淑徳大学の学生やオーディションで選んだ名古屋のダンサーなど、自分より若い世代の人と一緒に作りあげるなかで、この人たちの思いをかたちにしてあげたい」と述べる浅井氏にとって、作品・舞台を準備する過程への若者たちの参加は、アートをきっかけとして、中川運河を外に開かれた交流空間に変えてゆく意味をもつにちがいない。映画制作にさいして、中川区の住民はもとより、東京から応募した人々をエキストラとして登用したという木全氏のコメントにも、作品づくりこそが中川運河の魅力の人々が共有するため

の第一歩という考え方が表れているのではない。

以上のように、インタビュー調査の結果をみるかぎり、アート活動を行っている主体にとって、中川運河に人を集めることの意味は、外部主体の参加による価値の発見・共有、あるいはそれを通じた地域社会の文化へのアクセス向上やエンパワーメントとして理解されていると言えそうである。そうした考え方を、中川運河再生計画が「にぎわいゾーン」について打ち出した「運河の歴史や文化・芸術を楽しむ市民活動の継続的な実施を通じ、都心地域に集まる人びとが訪れたいような「港と文化を感じる都心のオアシス」の形成」をめざすという目標と見比べたとき、両者の間に一定の温度差があることは否定しがたい。中川運河でのアート活動を資金的に支援する企業の立場から、小澤氏は「世界の人に中川運河は芸術をやっている場所だと認識されてほしい」と述べる。おそらく、アート活動への社会的承認を得たいというのは、中川運河の

表 4 インタビュー結果の比較検討 (3) : アート活動を取り巻く問題

<ul style="list-style-type: none"> ・常に活動できる場所がない。倉庫は、アーティストにとって魅力的な場所だが、消防法などの関係で常時使うのは難しい。 ・今の状況では、質の高いものをやっても残らない。場所も自分で探さなくてはならないし、ふだん運河で活動していても助成金はもらえない。
<ul style="list-style-type: none"> ・運河に足を運べる人だけを選べるのはよい点。ただ、助成額は世界的にみても大きいから、海外の作家も参加したがるかもしれない。にぎわいゾーン以外でもできるようにになったらいいと思う。問題は、場所の交渉や予算組みのことがあって、応募も含めて、敷居が高くなってしまっていること。 ・年に数日、3つのグループだけだし、お金のあるときだけのイベントでは定着しない。もっとたくさんの人が参加できたらいいのだが、今の助成金のシステムではグループを増やすのは難しい。 ・ARToC10 に応募する人があまりいない。中川運河を知っている人たちだけしか応募していないのが現状だが、知らない人にこそ来てもらわないといけない。とはいえ、何でもいいわけではない。クオリティを保ちつつ、いろいろな人が ARToC10 を利用したらいいと思う。価値観を固定化させないようにすべき。
<ul style="list-style-type: none"> ・助成金はありがたい。ルールがあった方がやりやすい部分もある。アートとして考える部分と、プロジェクトとして都市センターと関わる部分の切分けができていて、問題はあまり感じない。 ・現状では、すべての企画に人を呼ぶ力があまりない。アーティストが少なすぎる。中川運河にいろいろな人が関心をもっているものの、すべての主体が点になっている。みんな、「良くしたい、知ってほしい」というビジョンは同じなのに、点が面にならないので、点が面になれるくらい強くなるしかない。東京などのまったく違う所からもアーティストに来てもらいたいのが、ARToC10 の規定上、それができない。つまり広がらないということで、それではアートの意味がない。何のためのアートかをきちんと考える必要がある。

(資料)インタビュー調査にもとづいて作成。

アートに関心を寄せるすべてのステークホルダーに共通する思いであろう。しかし、アートを自ら実践している人にとって、そうした思いが「にぎわい」創出へと直接向けられるわけではないことには、十分な注意を払う必要がある。

3. アート活動をめぐる問題

さて、価値観の転換と交流空間の創出の両面から中川運河のアート活動に対する意義づけが確認できたところで、インタビュー調査結果を利用したいま一つの検討材料として、アート活動を取り巻く課題に対する協力者の意識をみておきたい (表 4)⁹⁾。

インタビューを通じて表明された問題は、いくつかのタイプに分けられる。一つ目は、中川運河沿いのアート活動に対する制約の大きさという、ARToC10 による助成制度のあり方と直結した問題である。具体的には、「常に活動できる場所がない」という言葉に集約される場所確保をめぐる困難な状況とともに、助成金の使途についても、少なくとも一部のアーティストにとっては、「ふだん活動していても助成金はもらえない」ことが活動に対する足枷のように映っている。

前者の場所の問題について、助成制度を運用する行政の立場からは、「まちづくりは自分の住んでいるところをよくしようということ。つまり、地域の人に受け入れられるプロジェクトでなくてはならないので、プロジェクトの選定は地域の協力や地域とのつながりを重要視している」という考え方をもとに、応募者自らによる活動場所の確保を求めている¹⁰⁾。しかし、運河両側の倉庫敷地は名古屋市の所有地であり、港湾関

連を中心とする事業者への賃貸に充てられている。そうした中川運河に固有の制度的条件は、通常のまちづくりにはない制約要因であると同時に、工夫しただけでは、官民連携の新しいモデルを追求するための道具立てにもなりうる。アート活動を再生の梃子にしようと意図するのならば、それを土地利用の権利関係のなかに位置づける筋道を明らかにすることは、行政の立場から、やはり避けて通れない課題ではないだろうか。

二つ目は、応募・採用ともにグループ数が限られていることに対する批判的な見解である。採用件数が選考の考え方に左右されるのは言うまでもないが、採用団体の間に応募段階から参加者が少ないという意見があることは、看過できない問題を提起している。「もっとたくさんの人が参加できたらいいのだが、今の助成金のシステムではグループを増やすのは難しい」「中川運河を知っている人たちだけしか応募していないのが現状」といったコメントには、たんに場所確保の難しさだけでなく、応募の門戸が中川運河に通じている一握りのアーティストのみに開かれている、という批判的な認識が反映されている。サイトスペシフィックな作品に意義を見出すのであれば、中川運河という場所への働きかけは不可欠の条件であろうが、そうした仕事は、必ずしもふだんから地元で生活しているアーティストにしかなしえないわけではない。ARToC10 が「海外の作家も参加したがるかもしれない」助成制度であるとすれば、作品のモチーフあるいは舞台装置をなす中川運河に新しい光を当てるアイデアを広く問うための機会として、この制度を柔軟に活用する発想が必要ではないかと筆者らは考える。

そして三つ目は、何のためのアート活動に対する助成なのか、というより根本的な問題である。「アートとして考える部分と、プロジェクトとして都市センターと関わる部分の切分けができていて、問題はあまり感じない」というコメントの一方で、「現状では、すべての企画に人を呼ぶ力があまりない」「何のためのアートかをきちんと考える必要がある」という意見があることをいかに解釈すべきか。作品制作に邁進するアーティストへの支援から一歩進んで、運河再生という目標に踏み出そうと企図するならば、それは、都市の空間整備や新産業の育成へ至るプロセスを促進するための手段として文化を位置づけるという、一つの重要な政策選択を意味する。協力者らの一見矛盾する発言から透けて見えてくるのは、政策選択の根拠をなすコンセプトが共有されないままに、局部的な政策ツールだけが走っている現状が孕む限界性ではないか。

V おわりに—アートがいきるために

本稿の検討を通じて、中川運河でこれまで行われたアート活動に共通する一つの大きな特徴は、作品のモチーフまたは舞台装置として中川運河らしさを追求する、サイトスペシフィックな性格にあることが判明した。「中川運河アート」とでも呼ぶうるものが姿を現してきたことこそが、ARToC10という政策ツールがもたらした最も顕著な成果ではないかと筆者らは考えている。

アーティストたちによる中川運河らしさの探求は、狭い意味での芸術表現の域を超えて、作品を通じた表現者と鑑賞者の繋がり、あるいは作品表現を囲む鑑賞者相互の交流に動機づけを与えるものとなっている。筆者の一人は、視覚的な表層の背後に埋没しがちな固有の空間文脈について、関係性に焦点を当てた「空間コード」として概念化し、中川運河再生の方向性を見通すために、空間コードをコミュニケーションツールとして共有することを提案してきた（竹中、2016）。空間コードは、固定化された知識体系ではなく、市民意識をもつ人なら誰でも参加できる開かれたプロセスである。「中川運河アート」をつくる活動は、既成の認識枠組みのなかで見落とされがちな価値への気づきを与えるという意味で、空間コードの探求と方向性を共にする営為と言えるかもしれない。

さて、中川運河の未来を展望するさいに、上にみたようなアートの働きが示唆するものは何だろうか。本稿の最後に、この点に少し踏み込んだ検討を行ってお

きたい。

アートが人々のまなざしに変化をもたらすきっかけになるということは、裏を返せば、現存する中川運河には、アーティストにとって着想を得るだけの十分な魅力があることを意味する。サイトスペシフィックなアート活動が実現してきたのは、見逃されていた中川運河の価値を浮上させることであって、中川運河という空間文脈とは関係なく流通しているブランドや商業モデルを持ち込んで、にぎわいを意図的に作り出すことではない。むしろ、インタビュー調査からは、中川運河には騒がしいにぎわいは似つかわしくないという、協力者の多くに共通する認識が伺える。中川運河再生計画は、沿岸用地ににぎわい施設を誘導することを方針の一つとして掲げているが、ショッピングセンターやロードサイドにあふれる商業施設が中川運河の水際に立地した場合、いかなる影響を及ぼすかについては、十分な思慮が必要である。協力者たちの中には、そうした商業施設の乱立によって、創造力を掻き立てる運河の独特の雰囲気が損われることへの深い警戒心があるように思われる。

ここで注意すべきは、中川運河らしさを顕在化させ、その価値を共有する集合的な行為の意味を、倉庫建築などの形態やその機能の静態的保存として短絡的に理解すべきではないということである。そもそも、沿岸用地が事業者賃貸され、遊休地をほとんど生じていない中川運河において再生が必要とされるのは、かつての物流軸に代わる、運河空間にふさわしい活動のあり方が見出されていないからではないか。そしてそれは、高速道路のインターチェンジ付近や埋立地に造成された産業用地に明らかな立地優位性があり、名古屋都市圏における中川運河の位置づけや運河を取り巻く空間文脈と積極的な関係を結びえない活動であっては、ほとんど意味をなさない。とすれば、中川運河ならではの新しい利用価値の発見のために、アートはどのような役割を果たしうるのか。

中川運河の大きな特徴は、日本を代表する国際貿易港に成長した名古屋港の喉とすべき位置にあって、都心に向けて食い込む細長い港湾空間をなしていることにある。つまり中川運河は、都心から港に向けて延びる「長い玄関口」の役目を担ってきたと言える。中長期的な視点にたてば、名駅エリアを起点として外港に至る同心円的な空間構造のなかで、両端を繋ぐかたちに挿入された中川運河は、新しい都市の文化・経済創出を牽引する軸となりうるポジションにある。そうした軸への性格づけとして、チャンネルアートが主催し

た 2016 年 3 月の「チャンネルアートミーティング」では、工学系コンテンツ産業や若い世代が担うカウンターカルチャーなどのアイデアが提示された。これらとアートの間にある潜在的な関係は、インタビュー調査でアートとものづくりの協働に言及した浅井氏をはじめ、多くの人々によって認識されはじめている。細長い港というユニークな都市軸に沿って形成される新たな利用価値こそが、中川運河にふさわしい「にぎわい」を生み出してゆくのではないか。

とはいえ、都市戦略のランドデザインのなかに中川運河を位置づける作業は、本来、再生計画に関わる意思決定の最も高いレベルで行われるべきものである。アート活動は、中川運河らしさを発見し、その表現の周りに人々の交流を生み出すことで、追求するに値するにぎわいづくりの方向性を教えてくれる。都市政策を市民のための緑地づくりに譬えるならば、新しい種がアーティストの手で蒔かれるによって、人々の気づいていなかった土地のポテンシャルが開花すると言えようか。しかし、そうした萌芽的な動きに触発されながら全体的な造園デザインを見通すのは、社会的認知の裏打ちを得た施主と必要な専門性を有する造園家の任務である。アート活動が運河再生に向けての有意義な一歩となるためには、中川運河の市民社会にとっての利用価値を明確化する広義の計画論を打ち出すことで、アートにこそ担いうる役割を見定めることが必要だと筆者らは考える。

そのためには、産業政策、文化政策、国際化戦略といった都市政策のさまざまな領域を横に繋ぎ、中川運河再生という空間政策へ落とし込む知恵が求められる。横浜で BankART が成功したとすれば、それは、文化・芸術を柱とする創造都市・横浜の都市政策のなかで、創造界隈形成の起点としての明確な位置づけを与えられた (BankART1929, 2012: 4-7) からではないか。もちろん、行政計画としての狭義の都市政策のみが重要なのではない。たとえば大学の役割がある。BankART が当初拠点とした馬車道の建物を東京芸術大学大学院の映像研究科が引き継ぎ、横浜の創造都市構想と連携した活動を行っているように、芸術系をはじめとする大学は、地域イノベーションを追求する都市政策の主要アクターのひとつとなりうるはずである (本田, 2016)。

ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟している名古屋は、栄南の国際デザインセンターを拠点として、国内外のデザイナー・団体との交流イベントを活発に展開している。しかし、インキュベシ

ョンをはじめとする市の産業振興事業との連携が弱く、ものづくり都市を自称する都市圏にありながら、デザインの発信源となる地区はいまだ形成されていない。名古屋駅東の名古屋国際センターは、多文化共生社会の実現を掲げて、地域の国際化を推進している。しかし、留学生が生活する国際留学生会館は、市内でも近隣に大学がない港区の一角に置かれ、これを国際交流拠点として都市空間に位置づけるという積極的な発想は感じられない。結局、都市センター、デザインセンター、国際センターの 3 センターをはじめ、創造性や国際性をキーワードとする都市政策推進の道具立てが数多く用意されているにもかかわらず、すべてが機能的・空間的に散逸しているようにみえる。そのことは、たんなる分散配置を超えた戦略性がみえにくい施設配置に端的に表れているのではないか。

バラバラに取り組みされている新産業育成、文化へのアクセス向上、国際発信力強化を束ねて大きな力とするには、ものづくり地域とデザイン都市という 2 つの層を有する名古屋大都市圏の空間政策へとそれらを接合することが不可欠である。はたして中川運河アートは、都心から外界にアプローチする運河に対して新たな利用価値を与える戦略を発想するための導火線になりうるだろうか。

注

- 1) 各地の芸術祭を扱った最近の文献から、ここでは、「越後妻有大地の芸術祭」の意義について研究者の視点から論じた澤村 (2014)、イベントカタログでありながら、大館・北秋田芸術祭の現場から肉厚のコミュニティ形成論を提示した中村・アート NPO ゼログテ (2015) の 2 点をあげておきたい。
- 2) 本稿は、竹中を指導教員として金原が制作した卒業論文 (愛知県立大学外国語学部 2015 年度卒業論文) を下敷きとして、大幅な再編集を施したものである。卒業研究では、竹中が金原に基本デザインを提案し、金原がインタビューを中心とする調査を単独で実施した。そのうえで、本稿の準備にさいしては、金原の卒業論文に収録されたインタビュー調査の結果・分析を土台としながら、竹中が中心となって理論的な位置づけや分析結果の考察を見直した。結果的に、本文・図表とも、金原の卒業論文の趣旨を汲み取りながら竹中が改めて起草し、金原が確認・補完するという手順で完成させた。
- 3) 詳細については、中川運河チャンネルアート Web サイトを参照されたい (<http://www.canal-art.org>)。
- 4) 伊勢湾フォーラムの Web サイトでは、入賞作品を閲覧することができる (<http://isewanforum.org>)。
- 5) 名古屋市・名古屋港管理組合「中川運河再生計画 歴史をつなぎ、未来を創る運河—名古屋を支えた水辺に新たな息

- 吹を」2012年10月, 111p.
- 6) ARToC10の詳細については, 名古屋都市センターのWebサイトを参照されたい (<http://www.nui.or.jp>)。
 - 7) 2016年度も3団体の事業が採用されているが, 本稿の直接的な考察対象ではないため, 詳細は割愛する。
 - 8) 2014年の公演に関するコメントは, 竹中(2016:128-129)に収録された浅井氏に対するインタビューの内容にもとづく。
 - 9) 本項については, インタビュー記録を掲載するにあたり, 発言者を特定しない形式とした。
 - 10) 名古屋都市センター・稲野由美子氏への聞き取りによる(2015年10月9日)。

文献

- BankART1929編(2012):『BankART Life III』BankART1929, 255p.
- 岡田昌彰(2003):『テクノスケープ——同化と異化の景観論』鹿島出版会, 188p.
- 川端基夫(2013):『立地ウォーズ——企業・地域の成長戦略と「場所のチカラ」』新評論, 286p.
- 澤村明編著(2014):『アートは地域を変えたか——越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000-2012』慶応義塾大学出版会, 184p.
- 清水裕二(2016):創造力の空間, 竹中克行編著『空間コードから共創する中川運河——「らしさ」のある都市づくり』鹿島出版会, 104-111p.
- 竹中克行編著(2016):『空間コードから共創する中川運河——「らしさ」のある都市づくり』鹿島出版会, 224p.
- 中川真+編集部編(2011):『これからのアートマネジメント——“ソーシャル・シェア”への道』フィルムアート社, 187p.
- 中村政人監修・アートNPOゼロダテ編(2015):『大館・北秋田芸術祭2014「里に犬, 山に熊」』アートNPOゼロダテ, 156p.
- 平田オリザ(2013):『新しい広場をつくる——市民芸術概論綱要』岩波書店, 248p.
- 本田洋一(2016):『アートの力と地域イノベーション——芸術系大学と市民の創造的協働』水曜社, 179p.
- 野田邦弘(2014):『文化政策の展開——アーツ・マネジメントと創造都市』学芸出版社, 221p.
- 茂登山清文・則武輝彦(TENPO)編(2012):『中川運河写真』eight, 95p.

THE GEOGRAPHICAL REPORTS (Chirigaku Houkoku)

Original Articles;

- Thinking of Arts as a Way for Revitalizing Nakagawa Canal, Nagoya
..... Katsuyuki TAKENAKA Ayane KIMBARA 1
- The change of meanings of "Shikoku Henro(the Shikoku Pilgrimage)" as a cultural landscape under the movement for World Heritage registration
..... Shinbayashi Tomonori 17
- Research Notes;
- A Note on the Study of the Dutch Border Regions from the viewpoint of Transformation of Spatial Dynamics and Cross-border Mobility
..... Takahiro ITO 31
- Effects to a tourist place by the "Lovers' Sanctuary" project:
a case study of two sanctuaries in Kitakyushu City, Fukuoka.
..... Ryoji KATO, Takahiro TANAKA, Kana SOBUE, Shogo NAKATA 51
- Current status and issues of Food stalls in Fukuoka City:
After "Fukuoka City Fundamental Ordinance against Food Stalls"
..... Daichi SENOO, Takuya EYO, Minami YOKOMIZO, Wataru YAMADA, Ryogo ABE 59
- Migratory patterns of walkers in the shopping district between large commercial facilities:
A case study of "Kawabata Dori" in Hakawa, Fukuoka City
..... Kaoru KOMURA, Shintaro SAKA, Ryutaro FURUTA,
Taiki SUMIMOTO, Yu NAKANISHI 67
- Results and issues of the open-air café project in Tenjin area of Chuo, Fukuoka City
..... Shogo NAKATA, Miki HARAİKAWA, Daichi KATO, Seiya KANAMORI 75
- Locally-oriented management strategy of "Karashi Mentaiko" manufacturers in Fukuoka Prefecture:A case study on a long-standing company "Fukuya"
..... Naoma KATO, Megumi ITO, Yutaro KINOSHITA, Ryogo ABE 83
- The assessment of residential environment and the attitude towards natural environment of the residents in Fukuoka Island City as "Environment-friendly City"
..... Yu NAKANISHI, Yusuke HAYASHI, Kohei ARAKAWA,
Nanae UNO, Soichiro WATANABE 91
- Practice Reports on Education;
- The class of the tourism with the viewpoint of resort-materials in Ishigaki Okinawa prefecture :
An example of fourth grader in elementary schools
..... Kiyoshi TERAMOTO 99
- Geography from the high school to the university
—Based on lecture charge in Aichi University of Education—
..... Yukihiro TAKAHASHI 105
- News of the Association
Accounting Report
Editor's Postscript

**ASSOCIATION OF GEOGRAPHERS
OF
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION**